



遠近新聞
第二十五號

定價一匁



西垣文庫
文庫10
7265
23



特 文庫10
7265
23



遠近新聞第二十五号

慶應四年五月廿五日

○下谷辺の人の話

去る十五日朝由成道に於て戦争始まりしに官軍方より霰弾を放ち彰義隊之が爲に大に敗られ上野へ引取りしに右も引取りの途中にても接戦ありしと見へ廣小路にも彰義隊の死骸これありしと
さて彰義隊に此所ありしに湯島の敗走して上野山内へ引取りしに官軍方追々攻寄り九時前後上野方の山王山より大砲を放ち黒門辺にても小銃を發し官

遠近新聞 第二十五号

百二十五



5734

軍方の廣小路は陣取り上野は向ひ大砲小銃を發つ
せり

官軍の小銃隊御橋は陣せりとりふ者あり又上野
方の小銃隊御橋は陣せりとりふ者も何れも
實あるを知らず

榊原中屋鋪内よりも上野は向ひ大砲を放ちり惣ド
て四斤半の大砲多しとりふ但し二十四斤以上のも
のありんハツ半頃地響きの烈したるもの二發あり
榊原中屋鋪内の官軍より時々天神の臺へ向ひ小銃
を發せり右の天神の辺は彰義隊居るや否を試る為

ゆありんとりふ

千駄木の戦争の二話有り或は彰義隊始終勝利と云
されども彰義隊始終勝利ありは駒込より本御通り
は向ひ押出さづれば却て跡戻りしをみて此
話の虚ありん今一ツの話は彰義隊始めの勝利
ありしが後日の敗軍の趣きにて最初團子坂より官
軍方利ありき引取らんとせしは彰義隊の伏兵所々
より起り官軍の旗色よろしかる此時太田の屋鋪
辺より官軍の伏兵起り之より彰義隊打敗らる

頭分一人打取られ遂に大乱をよ谷中をさして引取
りしるす

○駒込辺の人の話

官軍方何もの兵もや駒込の水戸中屋舗へ入らんと
せしは門番之を拒し由りて官軍方門番を斬りて
屋舗内に入りしうが邸中の人と戦ひ暫くありて
他の兵隊も亦之攻入りしる櫃子あれども其後のと
り詳しき事ありし

黒門の守兵先まは敗れしと云ふものあり又車坂

門の守兵先まは敗れしと云ふものあり

黒門の攻手は余程苦戦の趣きしとて死人傷人多し併

し遂に門を打毀し乗り入りしる由

上野撃破られし後ハ屯集せし者淺草辺に向ひ逃

れしと見へ本郷辺の官軍追々引揚げ砲声次第に遠

くありし

官軍方の死人怪我人の官軍より戸板又ハ車に載せ

直に取片付けし其数お分らば彰義隊の死骸ハ

十七八日の頃中を其俣打捨てありし

上野の時鐘ハ八ツ時中を慥に閑へし後ハ往て之

を見るは鐘樓の灰とあり鐘の微塵も砕けたりと云
或人曰く鐘の火を燃し少し計り暖め置き之
を打ちぬ忽ち砕らるものあり此度も砲火にて鐘
樓焼けて鐘の何れもなくなり所へ二度目の彈丸飛
来り鐘も當り砕けり又の鐘樓焼失し鐘地も落
ちて砕けりありん

○官軍の荷物を運びし者の話

備前の其屋鋪にて酒肴を設け念頃人夫を勞せり
より長州の何もの屋鋪に於てや玉關先きは焼き
賜と酒を置き人夫は勝手次第に飲せりぬ且つ多分

金をあつて返せり其他も荷物を運びしものより
大概相當の賃をあつてりなり

○
十四日は官軍方にて千任の大橋を落せりとりん噂
あり真偽詳ありん

○
中仙道戸田の渡し手前は何者もや侍体の死骸五六
人あり
熊谷土手の何れも諸所は死人あり或ひは草の上
に卧し或ひは用水の中は轉び落ちたりなり

二十一号又載せし上野へ出張にあ成りし人数
の中湯島より黒門前内人数割は藝州と河多の傳
の誤りも七実の薩州のよりの今爰に記して看官
の報告は

○示文助

無名氏

藥師通堀水西六十老翁稱文助。四肢萎軟兩耳聾。貧
寒獨居無所據。聊解導引與按摩。爲他雇役送生涯。狐乎
狸乎將天狗。學得幻術實足誇。能察未然懲隱惡。更於疑
事辨曲直。吉凶禍福如指掌。所示歷々無虛飾。四隣敬之

又尊之。寄贈貶貶或與衣。俄然富饒極温飽。起居非復昔
日姿。投機憶起一奸計。敢向衆人弄智慧。街頭購求大黑
神。欲誑愚民釣厚惠。何識有人察其情。探索履歷自分明。
釀成隣里鄉黨怒。一敗塗地布醜聲。群小相迫督責急。吐
實請憐徒號泣。昨日富饒夢一場。貧困遂至不自給。世人
極口不假借。笑之嘲之何籍々。余也聞之獨惘然。竊爲文
助解譴責。其愚其奸不足論。知過改之自可尊。畢竟不悟
安其身。縱欲巧詐忘流言。請見冠冕腰劍士。冥中施術或
類似。榮枯盛衰如浮雲。朝起暮伏無定止。

○永代橋辺の人の話

去る十五日彰義隊追討のせり町人共最寄々々の火
の見は登り見物り〜居り処官軍方より一同謹慎
疑在るべきは見物り何事ぞ早々火の見を下り
むべし若し猶豫するは於て打拂ふべきは自身
番へ下知あり自身番よりの傳達手間取り赤ど下り
ざる内は官軍火の見は向ひ小銃を發せり素より畏
の爲めあれは彈丸高く空中を飛び去まども火の見
の見物人大びな狼狽して下りし体は實は言語も
尽しが〜

徳川□□□

駿河國府中之城主は 仰舟領知高七拾万石下賜

以旨は 仰出の事

但駿河国一圓其余は遠江陸奥两国に於て下賜の
事

別紙

今般家名相續は 仰出の事爲由禮上京の致事

同

徳川家臣之輩自今官位之儀は差止の事

五月

自今藩屏之列ト加カ以テ旨旨

一橋大納言

仰出仰以以事事

田安中納言

同文言

今般藩屏之列ト加カ以テ舟舟為為禮禮上京上致致事事

一橋大納言

田安中納言

同文言

